加氣路婦日記

七

精齡日記下之中

やとなんかくてれこそわよなりわぬれた人ゝう
ゝしなれかあれたきえ次れかゝ半とになく
てとてゐ九八月に秋まいゝ乃むを行きれせ
まりよなや歯しきとわとてなてわつ
き九月よなりわねさう綱乃絲なうきなて
らなるとくきひとさとけ八代まくなる
よやうとせて代ゝわきなてきうれかし
こよれなてほとくなる人よ半て歯代とる
くいひく
かくしねよれひそめよきるゝやわ草

宮城文庫
宮城文庫

ある人をしよぬうきもつて紙ば
とかきてなりにむをひたあてるいたまる
よ所者てをの乃をるわり
あやめ草紙よりかくとは月ゆ
いつかとまちしかひをあるまれ
ゆよいはひやかをしてをしるよ
りう袖ハ紙くとねきへあやめ草
人乃世をかよかけてかをを
四月人の事
いき所ん世をとハきをりやめ草
あやなき袖よかけをもりなん

といひしなり六月所ともてもわあやこし
まわてを四月者るかはと海さわて人なる
りよ所をうきわよをを海所をなり先れをよいて
よ世るとなやはいたもくれををねよ
乃いり山よりひををしほくしりたよ
ア四いりををなんをるといい世るかへを
をにいはしかきわよれるひをてあ世る
九をはほやけをいくく給ん世くいまを
こ乃太又を人くくくてあせ給へちを
仲とり給へとかくよわなよとれをりん

うきのうしてなまこほぶく十日よなわ
ねしと日わ半とりよ所ものあるなやは
きとのこあつと所くれはうなきたとよなわ
よきるというになとあるかへとと又乃ひ
を乃をるにあ所る所日ハかへときこゆ
ゐくれりい半毎へれこ乃半とわなて
ハきこえんこをひなきんちよなわよきれ
ハなんいにとの半とりを半るハなようよ
ゐ所ことりわよ思ひまるをきこうら
ゐいなゐくいとんやをくなんなわよる
ほらよえんくときこひさをれをゆや

やうきをわむれてかをてハ所をよれへく
所きとし所ゐるりをきうへてかをわねとゆ
めてるれてやとあらにをつけてうちいて
れきるこ乃ゐ所ゐくをこ乃半くをまひいゐ
う所なくて中ををれハ半とこ乃をを所
れりのやゆ乃ゐくほとくきをを乃こえなきゐ
ゆをを乃れををしき人ハいこを所きさ
なんわやゆうゐ所ゆ乃ゐくをなへゆこ
れをかれを一よきくきこれわゐ日にをな
きゐるとりよを人ゆをこをわれわまゆも
海半をとりいえんをいとゐかゆきれハ物ハ

いとそらうちよれほゆるう
永そこにやけくねちやほき次
そらわすりひまする走こなくん
やはきのていそしきるかてはまくど
六月よなつしんかしれそのあさひのけ
いとるしきれそなむしにいて生る
よりくはしき人のをちかくれほゆまハやわう
うそ仕事してしき第ハせそのこをいとし
きうたわたるとれほつうなてまえ
こはやしなしねわれきなあるきわよくく
そしてはきはをちてきのうきるよ生てる

ほとにあはうにいちそやうなきこれハれや
ろきてわちあまきそいよひわくとい
なねせこきよをるしむし生にときせちと
きつと生るよそむとわこつよあしせてきうく
となきこちるよれうしそあくれにもう
ものそこちのうちそあると米なるわをる大丈そそ
てきいのところあやふ
なつやまのこのしたをかのもれを
ろそなけきれなりえよをる
かへるとと

はゆきのいろりえねまにハとのしば
いくしほとくろしかをるん
みとりのほくよよねよなわてちつしき
ぬまこ海やうにてあるとゝるいとこ海き
うなちわちわさ海しきゝめちんあさ
まこいのうひなまてなうこ海ちきさ海よ
ゝてなる所をとひねまとなあるとかしとか
つれりひをへハいえゝなんわゝれはあるを
ゝわをよいわくゝをゝ乃ゝ海わさあるきゝ乃
いくなゝちわみしゝハうにうゝ乃ゝ辺てない
れなくゝとさはかしくてちゆくゝも人

ちいうにとれをゝんあるまてれとれし七月十
ゝるよちわてまらゝとかゝをねまてなこ
をなゝにまくゝにてほあゝとゝ乃ゝをなと
さ海くゝみちけくゝ人くゝ乃くきさゝとき
くをわゝれみをわるをやをゝうををあるを
月をいゝ乃ゝてゝしてゝきくゝまゝこ海乃れ
ゝちぬをなくてあるをいうまてくゝうにと物
ゝいゝてゝれりゝさゝるゝハ月あをわねにい
ゝちゝ乃月わゝみわゝをゝをゝれゝちゝる
ゝをゝしゝ乃月ゝてうわくをゝてゝにくほ
うゝしいとかゝしゝうまゝきをゝてなゝとき

たゝしものはといたるいうなるたゝわんあ
しうをんほかるみるうよひなりやうく
ぬきたしねへしといふさやしをきたれ
こゝのはあやとをれりよをあひのゝある
しなもゝくきるをへよにきく十一月ゐ
なわていとれはえねゆめえゝわゝよう
てゝとまいゝあをとたしもあるあをしき
をしれほうんとちをよをのてもはいを
を祢ハゐとうをゝいくんねゝくあるゐ
よゝとうハといくゝれハゐゝこねゝハ
ねよくしわうゝしやゝちをつゝを

ゝ給へうしといひたくをゐるれをきこゆを
ようきわゝゝ給ちれハたんうはやゝやねつ
ゝていはこゝゝけいやいをゝくしまゝ
んよゝてかゝる十七月あやこつをあるゝ
ゝきたこをわゝよをわをまハちきわしを
いゝいれほくをきねまゝくいあはゐよこゝも
れほくをたくしわゝいよはゝちうゝなわ
よきるゝゝとあゝれと祥れかひたくふゝ大
をまいゝゝやこゝ祥ゝよをゝやるさきくゝゝかく
をこゝゝをこうをゝうゝうゝうゝはえへさわきんハ
うゝをゝをしゝ

ゆふされのやどのすゝむしねを
てるかつらのもとにすゝくてかきゐる
とあるをいうれりひきんきろいろにたの
さきにてかきくるわ
くもにかくいとそわやしきに吹し
やらるゝとものとまるゝ
きとちかへて
はゆゝしいのちかけきるくもの
あきうををしられぬせうん
くゝしとかへて又月明のきう
かれりのいてゝみやうんかくてみちわ

くろのやゝむ火代わとゝ日見わ
ゆきのきうをしゝ海しゝ行てハ見し
やてやちきるを物へなんかくかくとゝ那
又月かへてはるちやへてこひ
はやらるれを明月のハいとゝるわかしき
ちちとれハきこへをとゝいとせるわ又のあ
ハゆるやうしとかいとことわなるとゝて
とうやいてなきしゝきはを
ゝるうやしろ代かゝさこれきん
とわれときよあるとハをのいゝとかへてとゝて
あくゝんとれりひろまゝきに

見えうわえてしたかわよはとひたく
あるそれそきわまりかさしは
このさむもとかういひまきりりせハ又
さえしこそハうつきやまよなれるめ
まくむしこそやうきわなわをる
されうなこはやるとなんをうき人こそ今
りみちれ永ハとるりよりりに祢あきりつまく
いとわられみきなりめをるしわハのう
えんれりひいてよえとて情をそう
くさるうちみもいまやきみやとまとふく
いりちやまくつきまちてひもゆをは

されハようをもおれしをのをさいとひりる人と
和今くたくひまとれをよきへをれく九月
をまちね七七月りれよりたちとうをかてはう
なるよりをもつきしあつをるを人
件まよき事ををしなあとをれほえ祢ハうと
てやこねかをなはまいりをしまわをし
くれうちなるムなりナるりれよまいの
をのをる山てらみをもちもえうてらとこ
れうをいさなをまはをのを事人ををく
れかりこみりまをこ祢ををにこりム山いし
うれをしりきほとなりに作いるちりり月一

条乃大ーゝ乃れやゝう也給ふれと乃くち
ふもいの行かいゝしるといひてゝ行える
よけつゆき七八寸乃ほとゝなれ行しま
いそきん堂ちの乃ゆゝ給へんるとゝうそるこ
ともちゝきまゝれたりひれ也八まいの世中
いよくゝさくみくゝきるしゝとゝ乃十日わ
まわれえゝるゝつとさてやゝしゝれそれれ
ハまいの乃ゝとゝてて乃ゝきわわしゝゝ四日
をゝなわよゝちゝれとうれハあゝゝ侍まる
ゐちもせ次ゝゝひと行そいつゝしゝれとし
ゝるとわゝれとゝゝ十日行乃行よゝる

ゝゝ又十ゝる九日行よゝ孫てゝれゝるほゝ尺へ
こ乃ハ地をしゝ行やゝゝゝ尺へゝるこ乃比
行ゝさゝゝしゝてゝまいの乃いと侍なけにのゝる
二日よゝなわねこゝゝこゝい乃行孫乃ゝゝしゝわ
いろゝゝめてゝゝゝうにほひゝわいゝゝちにのゝ行
ゝれとえゝなれとゝなれとゝ尺ゝゝる人なゝ大文
地をゝわてゝまいの乃ところよゝる
ひゝなゝてゝゝゝ

花乃わをさちハ世しえきん
とゝくてをなほあるをのことやと成ちるゆ
てたいさち三月乃往よむま乃時とうわよ
へるわたつてくるかしうなわよ世るよいと
くるしきれといくくハせんと仲あるてかゝ梅
くさわ世きわゆてワ世め世るやえいたし
よたゝよ仲乃るさ孫乃あや文ハこほれ
わはしわしてかゝをん乃うへ乃くゝ成つや
くゝさしてくるかよれひちしてかゝるを
きくたくあなゝるしいをきゝうちゆけ
世きわたるかれなゝ思ひてなわとうち丸

いとたくをよハあるをまゝをひうしハてね丸
んとれりよてとかきわおしかゝふゝとつ
きせをなゝむるほとたたいさちうわあ
かちよなわよるんハいとなけよわをや次
とゝをなんあるをきる廿よ中仲よよの中
さくくをきけハされよやけにしたくところ
うゝこハれしなるるなきわ十月仲よまる
むるたゝるゝえてかをかんさつゑきた
ゆ乃れはつるゝなゝるゝとわるもきいなゝ孫
ゆわやしうれほゆ二月十五月よ院乃こゆを
くしまわていねなて乃くしるまつう

ぶつきてさうなしきをは而乃ゑと大丈ようちと、
かくをのをと申ス月ようなりてかん学をちゆあり
しとこしやひとくなりわをちゆこれのひ
わなくわて祈んせさわきるというなんとれ
りひくれとさいそにハいてくをろやーにつき
くわまをろうをとれやようんさーてうち
ねるをとろくをるさて又二三月をきて大丈
乃ちれをろやハうれしうをしうなくしれ
くまして家をしれはやけようハきいろ而乃
ころやをくろ而海にをようわつまくな
ゑとかて志のひやうにさてきハてにをる

やうにていをしうれひちくをのをされる
ひとゑをハけせんとを乃中にきいをゆる
人をとわをとさちわをちとれりひてゑるよ
をを　して家をハをなしきんちをすれ
まきわけをるををれわをさをれハた
ほにうちをさくををるくこ乃くを海をえつ
けてゆをとわつまををさかしてをるをねに
ふをわるかくをとを乃ををに昨日ハいをま
をゆくくをわをを海ひあきをかるハを
くハさハをてをちわんをろくうをかき
くわきわかくををにハれいろをかさに

こゝにあるときちまへゆきさきなるあしを
人人こゝにくきれんとおもふるゆき平て
てゝるれなわね月こゝろ乃平へまもう
はしさしきんちをくハまるめるよをわね
あるをんとゝれりのきる大文れい乃やこゝろ
よみをきのをるこゝにいつをてもゆをこれ
よわをいとれさなきを乃ゝとをのをいひ
きれゝうをのしきう
えゝれ乃ほゝいよゝて行やや草
なほしゝ平ゝをんれりのあゝやを
かゝゝとゝなをゝゝ

ちるかんゝを花ををゝうをを夜こも草
よにれひそゝし人ハるやて
かゝて又サるれ花よゝわさて三胃乃
ほとゝちゝう火乃さゝきをれとろきさを
きをるほとゝよいゝゝゝゝゝわ乃みきて
ひさしゝゝれ花わ花ゝほとゝよやゝとを
きねさゝなれをやてかゝるゝ行やをきゝを
ふゝんハ夜いわ平ゝ乃ゝるゝよゝきゝよゝて
かゝゝとねときゝもれを平ゝしをなゝわ乃る
みとかゝるをゝくしゝをまるゝところよ乃
けてゝえゆるなゝんかしゝ又乃こをわの又胃

まあるとくひいるまくにむをくらきよこそき
よつてしあれとくわれハ情しの学くハいろ
りとくえあつと五月のくしめの日よりわれ
ハれいの大文
うちやのひてきよきよきんほくき次
きのひもあくねやハ来よをわ
かへつとる
ほくきくうくれなき祢をきせてハ
うひとなれぬるえとやなくん
五月
をのれりよきしくをわやてわるね草

きよよ学るくをとしてそとる
かへつとる
ほをわきるきしのわやめもれもほくを
きしのをとてきわるんをゆをとし
と秋あるいうにうくを学るにうけんとわし
かわきるさてをいろのをのれりハはこのにきも
時くれるしやうなれ九月乃ほとにとほう
をのをとる人よやくくやんと乃情やくけのうちよ
ハくけうひをしをてとくわをしむを梅ほとよいて
きよるうわやうるやハひと情つけいをて給へと
古よいとくやハしうてえよむまくとわしハ

いとれたくしてのち給ふるものなるかきわよ
こいまして幸てまたよけるれもしりやうせんよ
とぬしくるをあし絶しましとものしつ三日
汗あつてくちちのいとくるうてもことゝさ
しもたれかなんゝ弟くゝ絶といのさわしを
のをとひてかくなんをのしまわくめし
うくくみてわ海るわきたまていとゝさ
半とかて給へやてあやもまたわまハとこ
なさをあるくちてまちそるれたりさ
きちハこゆきとさしうとさんもわ
いなくてうもめしきわ

トノ中ノ十三

うちやのをたのうつとよとわれし
かへしハ海くしかるあんゝ
ど汗そきのしきるお七月れるしを行よわ
ア行くそねたをわ廿八日よとさひのと
よゝわうちよさゝひたとうものを
んやてなひいそきいてゆるなとて見えを
きゆハきいのうやこ行よおけくなんとき
うたアとよきわと思うゝしくもなくて
のきあるよとんとろはなくわれゆをとを
くなにもあるしハんよをのしてるうとて
やこ行よあしせんとてみて秋乗せれひ人

さて七日あまり八はたるゝはゝほかに
ゝさとねるをしさんしやはさきくほのあ
うしゝさしたとと日なとんなくてやはやてき
ゝんさとゝるきとゝきのゝ世とたゝしむこ
とあるてなんとてつまもなけたはなまうハ
やてをとをしやてゝさをねゝちゝうゝな
かゝうきかゝるとこゝ物よとゝハゝれほゝきま
りゝとゝんハいとわゝんゝなるすまひとれほ
ゆ二三日よなゝわねまとゝきゝるとけをゝ立
ゝ日許さゝわゝきゝるとたゝあゝさゝわゝきゝと行わ
ゝをかゝゝとゝとゝよゝさたゝんとハたゝあゝきこゆゝを

なんれゝひゝしゝたゝむなゝきやゝこゝろよハ世とゝ
世ゝゝれほえゝしゝうハなんえゝるゝまひなんれほと
ゝこゝろにていまゝひゝゝさひきこゆゝをゝくハ思
ゝなとゝゝるえ世ゝるゝさ海よをゝのゝたゝさを
こゝやハあゝめゝひなゝるなんハなんやてゝわとと
ゝゝち世ゝゝわれゝよなゝてゝまゝゝゝきゝよゝゝゝ
ゝとゝあけてゝえゝいゝるゝゝれゝハゝゝちゝなゝるゝにも
とゝなゝるにもゝゝえきゝゝゝきゝゝゝちゝゝゝゝゝゝ海を
とゝをゝええゝゝゝ乃ゝえゝやゝゝれゝるゝをゝいとゝをのゝ
れゝゝて

なゝれてゝゝゝゝこゝ世ゝれてゝとゝゝゝゝゝゝを

家のうしはしわせよをそしを
とそいいそしきしるしんかしのうとけまへなる
ととをうわてのゆひうるてしてけうわうる海
さうにもええとしよへはあとい称うせてむ
ようにうひやいこわうをなてをるとうたたれり
半をちてあうをこ半うの人をしわた半をうやん
とに半をちいてくあそふれいのやころよをと
ろうしよやるあうわ
さこ海言をけつをしひとえわる海をの
くへえ半くをこよをやひをそん
かへうをうをふしよほとをきて

海ぬうき細よひえけくわうをかれ
半しなうきをのかしきなるやん
かへうをうわけをうをかしてかよ日にこ
のはをなうわねをとあとうをえうわるる海
しさハこけてやてゆのうをのあるはのをある
けるハくわをちよきわとひくしれろうなるう
なわかへうをこをせねにてあんやてるようく
をきをしてやをねあるをしをのやんちて
やをもなくてをものしけはのけちゆわのよ
ひちをえてかをしくけてねけをわるま
くしけんやてをハかをるこよも

なるてはもてるさ祢わるいうよせ庵しと
思ひやもしひてこれうまよいひわと次まハ
なとこのさひハうわんえよせよいといるる
やしよりこわきハうとさるひるとあるて
やうてきさしるけなるてて代いさちの日
大文にもせてをのしるたしいときるく
アさやなんあるとはるかてやこねわるあ庵と
又しれろうなわるてこれさもたきよわる
わるときれやこ詠ようねやのとあるとしを
えしはてもしくしてしといたちよそん
これよさにとあるしかとるとくしき

とさハえをのせとをとはるをやさ庵くよま
るわいのとなるわきろうてしさるこひ
発乃えるさよたあるた
梅ゆこをきわゆきさ庵とひしろ記き
るあやかき祢乃むちと半つねる
やて半ちてきれたれ祢ん一なて人たるひる
てこれいるてをものしきわたるひつとあてやう
へアさきるうをといろれうちきるしかさひうつき
るわ
えをわゆき庵よさひるるつと祢ハ
いろたしねよにはひまをかれ

みといのほとよれてちひろほともときね
きのひさるかさにいさとさをみ人もあるな
よゝハやうてをのしられて人れほうまてき
ゝとさんとしきゝんをきけもあちちよいまひ
かるとてるしうゝゝいさしつくなく
いとこ伝よゝるひいるなゝきわなし
うをしあるうれとしえ伝かるよれとなる
をのゝうはさゝをくゝてかゝれうしを
よていあるをゝハあるとけるこほわとひ
かゝへろてよけくゝもゝわてゝひゆゆ
えあるをのあやけんと思ねよるをる人

なる人もけといひうけぬれしひうゝるこ
ゝよてもとのゝすゝかといをきにそ
なとをのなわもわとれりひるよしろ
いてとれくしねハ思となるかとよ
まゝくしゝさいをの紙そねをねる
をかるどひとわこちて又思やう
つゝ枕乃ゝをほしはるもきゝなに
ゝかけゝても人れ　ゆゝくかれ
かへゝとて三日許わるてかるよまてゝち
ゆきほいつゝさなゝねゝとゝかわてゝいゝ
かわきゝようせおうわてゝなやゝけるねよ

きもしたきこゑもなつかねさしもとをくもとをきよを
ア十五日あらあるを大丈のさしきのれのこと
んるみ日をとしてさくとをきけハやうく塙
むをときてわなうをやるとしてこゑきこゆる
れうしさよやをとしとしてうるさよ世をちい
てえいさしくらんをとれうしかわ
ぎわいうんうしさ歳ようちえやわうれを
ふうをををうをわていをほのやうにうをに
をしうをようちう世をちてれをしねやすな
くれりのうてまをしハ日をちわ世くにしん人
しうなくてむつきよをなつわねるうしゆを

れはゆるまにるをうをわをくわ言をうれこを
ふくをて
をしうをうくをきをものをうふをハ
むつきやうをまうをきをまうをやうをん
とれほひくをわ十五日ア大丈きもにうし
なをとにもきれいかをなひるをとをるをとよ
ををんと思をはよにうをわ乃をとわわ
ろうしきををよてひをのをひよをなん
をしにあくをわをかうこをよろをひをのを
ふよをわ乃にうをさのかをれちをんをのををま
へをまをてをわをるいをかうをよろて

ひてことのたいてよろくよとのゝ給なるこゝち
きこハいうくゝものゝ給ふいゝたあるにやゝなと
はとゝひきわかへつゝてになんとかゝれハいうてき
れ給るあんなとゝらもなゝくれのひゝくつきはて
しほゝも祈てやきねぬ乃ゝ院乃くちわゆく
あへしかてさゝくかゝもてをもをゝか
ゝあいてゐ乃ゝもくあはいきあひたれゝ
ことのゝれ給へハいゝなるゝようたんゝかゝ
ふゝよ二月七日乃往よ長よゝ乃る年
はるかゝゝ海よしのむてれのひ平つなのよ行ふ
ゝくもあるもとゝいふをきとゝ海なゝわの

やきたてゝるゝこゝろたしなハあやゝゝれてき
こ海なれゝれゝるゝかるをきこちなれゝ海
ゝしいとゝわゝやまはやゝなゝ乃ゝこゝもせねを
乃れてゝきれハうゝひゝてゝをゝせ侯ゝの
ゝそゝゝつゝゝなるゝゝ海よゝきかへつゝなゝれゝ
平ゝるいんしゝうゝゝるゝき海ゝよからゝて
あるひゝもあるゝかゝうゝきゝゝゝつれゝてゝと
つゝふたゝゝハあゝもゝと思ゝくゝゝなのひの
ゝをほゝたをゝてゝゝゝゝあひ平ゝるんあゝうゝを
ゝゝまたつゝてゝゝゝゝとゝゝく行平ゝゝるゝを
ほゝいゝゝゝゝるゝうゝてゝよあげゝとゝきゝ

行よわちゆわりてねいとうわみーとれも
ひたくほうーとうのそうよりてわていうーさへ
きみとしいよのほとうーあをとうーんのう
さやとしんハさうく永いのとうたてなうむ
也ハまんなうるさうわくもうつくとこの
なるよいとうものかわしうて
わりのきやわまつやちなるなるもを
そてきうくとうるゆまんかは
とやれたへきーわとうるなりまとし
さてあるまーきんかとかうさしかていい
てねわとまなうんんんえやひてうる。や

永くるーさも海きる行ゆかうれたくきる
うーうてかへアとてゆ乃日いてねのかうよ
アさうのけてかへアとてゆ乃日いてねのかうよ
へうていのやうろくんきうちんうんんこの
こうわいとせちこんやまうねとんあるおそ
こよたんてはいうなよまるれほきなちや
ちらつきれうわやみくのうまいたるとゆ
かのわうもやんはれたせれたるこやわ
たみくなんんやまひたまはうわくなんう
つまハあさて行よき日なるかんねーまうて海
たるひんなんのうーこ海ひつるくかるいとあや

しきてかれまと板のめくをきれもつ。
とくれりのいたく祝ねこてきるようなりてき
あるといとかへつとうしきうちやひきよくあ
なるさ海しゃうちハれとけたきろハ
ちりの高とあるてかくよ氏ゃくアさくせも
へつとしうはとめさ海たうきうしめた
いまはやうてきこひさせとなんれほを絵と
うき絵くわすといとれはあなきろの
ちえつときるとれほしやうめさを絵ちん
とたくえくへつたるてなんたいてなくてと
さへかりの絵をしてたうさあしえ絵をし

よなんてれとけのきくめうかたしまをは
まいわくうんこと人こをうひまう思さ
海るよるみといとある色うるみしハ
ちるひまといひとつ人のたたうよみし
いうてさみうちんとあるかくつとときこゆく
きとまつてれていうなるとやとものし
てこれハかてあることのいやなやとれ
あしかてえ四月をんせをやてかくるほと
よ五六日よなわねれほくうなるやあるをん
をけのをてよをせちあきこくさとを絵きとん
あるとてよむ絵いるくやてあるほてよろと

ひハかへしつゝ乃紙よりわゝまとハいとほゝせ
ていとるほとよゝさまとてかへつと書るとゝ
きとゝれなるねれうとてやうもとかるゝめて
うていよひたゝ書ゝわてはいゝ乃かゝと
ゝとゝとゝろゝあゝ書ゝんかし

春雨よりゝも書る花ゝえるゝわも
人しもゝ分ゝ 袖をゝわゝき

あるゝきゝくなゝとゝれゝて分ゝとうきゝく
なゝとゝあうゝんゝあるゝきゝゝとゝあるゝくゝハゝるゝをゝち
ゝゝわゝをゝひいゝゝせんゝとゝくゝはゝれゝもゝゝゝゝや
ゝゝゝあゝんゝあひ書ゝるゝゝてゝまゝてゝをゝんゝ給ふゝ

ていゝゝゝゝくゝとてゝみゝゝゝう乃せゝゝゝゝゝきゝえん
ゝさゝ給ゝあひ書ゝゝてゝをゝゝくゝゝとゝ乃ゝゝるゝ給き
いゝゝゝゝゝゝゝゝきゝゝくゝ給ゝるゝゝゝかゝるゝゝゝい海
ゝゝゝゝゝゝ仲ゝあゝゝゝゝゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かしさてかへつさきをみやをとるこれ
ほうねのせうやとはこのしるしやなよや
と思ふ歌をしるハをなとちもきうく
のをとをうわしとろくハるをとの絵をせ
ふしろいしあやしうれたつうなきをと
つ祢をるたしのをとろこ汗よなわつよ
きれしなんされしなをとろをくらねハと
きうくさせんうさちやてものつとし
よのしにしたこのるすつせるむさハ
えくろうよくをとこそきくさをちれて
なんさてのちれなつやちるこをわ

つかくつとしくをひとにしもはねよいこ
くかわ平とわこはよなわねひしてに
きわこうこはに者てはうせきれハをの
人のかくつとしくえせるあるれはやせ給あ
れしなむこれかくなんとけくわせくへるこ
あるをえれしこのはもあしかわきわたきこ
ちてしなんこうこはんしてきくうきれ
平をはくをるなくにもうるいてあやしう
いちくやきこうこにもあるかれなてをこと
なわうるあしことけやくへくの人のやちこ
なんとれはくたいき七八月はたくのをる

はうとひまれうこかたしらしていてあるう後
うになりとてくんをのいそんとあるくん
よまきこしさよひるみしなくらつほとよい
つそしたるまうきれまくんよ世ちやをひ
れいもきよをなるくんれ祢そしてるよ
てなるくうちるなとし世ちをくてき
れいのくなれくあるというのわよきをこし
ろくれ世るれもてまきくうをたや
きほくよえひぬきれて世てるさ後湯
よかき世るたうなつきまつの人あるとて
わくまつをくるわんなつれをなくうち

やけをうにていてえうよときしを
われこ乃ほのをうをとゆくんきうち人ゆき
まくくをくれをるのく世るものと
家う人うにてわくんさはをまになよう
あやしれをてくくちもえなくたんと思
よきをくういくわくよくりそおれやこ
ゆくうちゆけてゆくんをて行つ世るん人
をれこをくほくよおるなりをわかるし
てれきいてくうよハもなきよしいようを
乃うちあをくしさよかくしえはかよて
まわれろし世るほくよなんをなるよくよ

きよ行しきなりきわきひてをろこうれほ
ひてゆのようきこ日なりワうるこの絵くわを
めんなとく行うるいていとくいなきつるる
とうちなりけきてかつをね二月許あるて半
ともしにて行るわほとよをのし半ぬを
ひきるかしこ海をみて伊勢て半てまつ
きてろちいてれほたうなて成てにーを
いうてとに初よあるとよげるいことゆ湯よわ
やーろこゑさてやくなくあるはゆるし
なきををけうるをのきこえんといかそう
くれよをのしーうわいくハさんかてうう

悔しく成てうあけてをれこよ火かんーてひさ
しくをのしーうわをけ半といかしてくやく
きてえんよろうほうぬたまとをひきあをて
えれうわとうてよかをしたのゆこうわものみ半ち
ろきてまろ四かせうかこ考こえさを半ぬく
かしをとをのいやうよをんていをてさな
んとをのをるよれほーかんとて海よき
えくよかしーみとくくをとこーうもうひて
ようきほくようもそよかきていわるをげと
をのかうわしのやうよしてほをうよあみき
ろうもあるをとをうわときくくして

みるかちもよとなりてやゝ白くなりぬ
はをひよ一日うひなりてまうてみしうは
ちかくなりまよなんかまきうへ絶くとていれ
くちくやうやうくしあるちもわてあも
ゆくえよりのまいとはらもちまわはさはし
てとしかしくしもうあるてれはたるる
うかんかやあちんとていさうちくよきの
きしきさるみはあてくきしをあれわ
しかちをるかわよちひあるくへとて
といをちあよてたりいちわをるよ
をとしいたはうちよはさいとまう

しきほとなたはうれ絶よをゆあるちち
なんをるちむさきしわを世よいなる孫
をそをいろほとよ世とたあなをいくわをな
きしたなんみとやうよ世をよをいとうた
くろの世をなわときけはをれをいとをし
あをうちうくれあてうくれをいと
をうしよみけはうちちもはかくひ
くたきなるあくちはちなる人世をよち
たちなくるをといひくし世たはるよ
うんちわまろと思をなくひしはれそろ
しきとくうくいひているくぬけ

ねまとけのきこの沿いよきもちうなり
あうんれたてのほとのちやとさよ
うちうんをくよわうんれはせまし
いきしき給ちわてしの又給とえこきえさ
せよわてわさてのほしもうをしと
われしまつなうとやてきすのほしろひよ
うきとけてえりはせはをのとよんしら
ちるむハをやうきこえよもちうちよハをの
さうの家よやんしうたしいうあとてな
きこへぬるもきまをなかうもうをとや
えへちんとれをよわさ海しうてらく

ろうきこへぬやうをの給りせてとえはよう
しさぬうへもこさをへてきちよきりきそ
ちぬまとしたしハをのしちれれしと
をこのをんしとこあハうゆるされうんとこ
ろうわさやうんときこをハをいてもえ
うやんと思へハせんとなきゆるされハな
をこうるをかてかしうあしうえこの
回とこやハれもわをハもへたよふのほ
なんうきロハうなるかてせめうれとをけ
ちるされうひのかうて海ちとをのをへん
しやのうとをわれよへハいよきのへ

ふとはちきりの兄やきりのいねのきよさ
れと兄はきていのようなるときのねさて
とうよいいしいちやきらちをしたりい
かるともなすきをこれそちのかん
れたせあるときやせんうときこえことの
こわしいそさしのるあこせたうのんと
かうまきをんとえせきて海のとたく
てのうへとしひきんとさと思うかん
をけのいをきまうたるほてよていとちよ
かんなりよきるれやんのうちをは
ハはしかりよちんちよものう絵へう

とわしていとうやときらちしてかくなん
えうるいちやかりきるこよハみちてう
てをはさしハこれきえうさせしかしものう
さしハかへてとしもなりてを許あるとてうち
うハいとちうきうしきうきえうさな
よちんすいりたるとわたしなのとよういと
れやうくしくうんさうハこなきよ
しいうをきハよくくわるよるうる日
いりたるとわハしなるとにうきていい
ちるかよなりやんきていうこと許とひ
こうものかうりうきちくしとちうとかと

ひさかたの空にてらすきてれる月
のてりまさしいなる月にて
ちさかたのうきうさいにほとき次
とうとうきまのかたなたにて
いかにしてましくしいうこはとたれよと
かしつてといとてとく
やすれひてかく
なやしつへとをさらに花やなき
かつのひとをとしぬるうさとたれとて

晴嶺月記下之中終

三枚